

知的障害児の話しことばに関する研究

—助詞の使用について—

池 弘 子

〈先行研究と目的〉

知的障害児(者)(以下、知的障害児(者)とする)の話しことばに関する研究には、語い量に関するもの(Schlanger, 1953; Mein and O'Connor, 1960; Mein, 1961; Mein, 1962; 小井戸, 1963; 渡辺ら, 1974), 文の長さや複雑さに関するもの(Schlanger, 1953; Lyle, 1961; Goda and Griffith, 1962; Siegel, 1962; 渡辺ら, 1974; 池ら, 1978), 構音に関するもの(Goodwin, 1955; Karlin and Strazzula, 1952; Goda and Griffith, 1962), 名詞の複数形や所有格, 動詞の過去形などの形態論的な面に関するもの(Newfield and Schlanger, 1968; Lovell and Bradbury, 1967)がある。

これらの研究から、知的障害児(者)の話しことばの構造は、被験児(者), 実験方法により差はあるが、M. A.とともに発達すること、知的障害児は正常児より発達が遅れるが正常児と同じ発達過程をたどる傾向があることが、ほぼ認められる。

日本語の特徴を考慮に入れた研究としては、助詞の使用に関するもの(山崎, 1964; 池ら, 1978)がある。

助詞は独立して意味をもたず、語と語を結びつけることによってのみそれらの関係を表わし意味をもつ語である。助詞を正確に使用するためには、その助詞のもつ論理的な記述性を把握し、場面との適合性を検討する能力が必要であると考えられる。したがって、抽象的思考能力が低いといわれる知的障害児にとって、助詞の習得はむずかしいことが推測される。実際、知的障害児の話しことばにおける助詞の誤りはしばしば指摘されることである。

しかし、すでに述べたように、知的障害児の助詞の使用に関しては、池ら(1978)が話の展開をとらえるために接続助詞を、相手への働きかけ方をみるために終助詞を取り上げており、山崎(1964)が助詞の誤用について分析を試みている程度である。

このように、知的障害児の助詞の誤りが指摘され、その指導方法が必要とされながら、助詞の使用や誤りの実態も

わからず、したがって、指導方法も系統だったものは見当たらない状態である。

また、正常児においても助詞の習得過程は明らかになっていない点が多い。

したがって、本研究は、知的障害児と正常児の助詞の使用に関して分析し、知的障害児の言語指導プログラムのための基礎資料の一部とすることが目的である。

分析は、助詞を習得する過程を明らかにするために助詞の誤りを中心に行い、習得過程を考えるために必要と思われる使用している助詞の種類、それぞれの助詞の用法、省略に関しても行う。そして、必要に応じて同 M. A. レベルの正常児との比較を行う。

〈方法〉

1. 被験児

知的障害児群

M. A. 6歳~7歳11か月の養護学校中学部生徒 28名

正常児群

M. A. 6歳~7歳11か月の小学校1年生 31名

2. 実験材料

1組(4枚)で1つの話になっている絵カード

13組

3. 手続き

絵カードの各組はランダムに呈示する。4枚を話の順序に従って並べ同時に呈示し、1つの話をつくるよう指示する。発話は録音し、文字化する。

4. 分析の方法

1) 助詞の認定・分類

助詞の認定手続きならびに分類基準については、ほぼ国立国語研究所(1951)に従う。格助詞、準体助詞、係助詞、副助詞、並立助詞、接続助詞、終助詞に分け、間投助詞は終助詞に含める。また、補助用言とともに用いられる接続助詞「て」はそれ以外の「て」とは別に扱い、接続詞の用法や副詞の用法で使われている助詞は対象としない。

2) 助詞の種類

Mein and O'Connor (1960) は、被験児(者)の50%以上によって使われている語を core vocabulary としている。ここでは、被験児の50%以上が使用した助詞を取り上げ、使用頻度についても検討する。

3) 助詞の用法

同じ語形をもつ助詞でもいくつかの用法をもつ助詞がほとんどである。したがって、使用の多かった助詞についてその用法を分析する。用法については、国立国語研究所(1951)の分類に従う。

4) 助詞の省略と誤り

助詞の省略と誤りは判定がむずかしい場合がある。そこで、本研究では、大学院生7名(男3名、女4名)に使用した絵カードと助詞の下に〜をつけてある文字化した文章をみせ、助詞の省略と誤りの指摘を依頼し、7名中5名が省略または誤りとしたものを取り上げる。

また、意味が不明であると思う文の指摘もあわせて依頼し、ある文を意味不明文と判定した判定者はその文に含まれる助詞の判定者から除外する。したがって、一致人数が4名以下でも、5/7以上の割合で一致した場合は、省略または誤りとする。

<結果と考察>

1. 助詞の種類

両被験児群の被験児の50%以上が1回以上使用した助詞の種類と使用した被験児の割合は、表1の通りである。ある助詞を7回以上使用したというのはその助詞を2つの文章*で1回以上の割合で、13回以上使用したというのは1つの文章で1回以上の割合で、使用したということである。

ここでは、両被験児群とも使用が多かった格助詞と、知障児群に使用が多かった係助詞「は」を取り上げる。

1) 格助詞

格助詞は、文中の体言について、それが下につづく用言とどのような関係に立つものであるかを表示する助詞である(西田, 1977)。

格助詞に関する主な結果は、以下の3点に要約される。

第1に、格助詞は、知障児群に使用者が2名いた「なんて」と全く使用されなかった「より」以外は、知障児群、正常児群とも、被験児の50%以上が使用していた。つまり、格助詞の種類のはほとんどは50%以上の被験児により1回以上使用されていた。

* 文章とはひとまとまりの言語表現であり、ここでは1組の絵カードによる発話をさす。

第2に、格助詞以外には第1のような点はみられなかった。

第3に、格助詞のうち、「が」、「を」、「に」は特に使用が多く、知障児群の50%以上が7回以上、正常児群の50%以上が13回以上使用していた。

第1の結果から、体言と用言の関係はほとんどの関係が半分以上の被験児により表わされていること、第1と第2の結果から、体言と用言の関係が文における基本的な関係であること、そして、第3の結果から、格助詞「が」、「を」、「に」が体言と用言の関係を表わすもっとも基本的な助詞であり、格助詞のなかで重要な位置を占めていること、が指摘できる。

天野(1968)によれば、どんな状況においても「を」と「に」の文法的意味に従うことができるのは、5歳児で48%であり、使用はしていてもどの程度理解しているかという疑問は残る。この点については、「助詞の誤り」で触れる。

2) 係助詞「は」

係助詞「は」は、知障児群のみが使用回数の多い被験児が多い助詞であった。

格助詞「が」と係助詞「は」の相違は、多くの研究者により論議されてきている。永野(1958)は、「格助詞(および、これに準ずるもの)」のなかに「は」を含めており、同じような意味や意味の近似した表現形式のひとつとして、「主語を示す『が』と『は』」を取り上げている。

そこで、各被験児の「は」と「が」の使用回数のうち、知障児群に多い「コレハ……」のような言い方の「は」を除き、主語を示し、2つの助詞が互いに入れ代わり得られると思われる使用回数をだした。すると、「は」の使用回数が「が」より多い被験児が知障児群には4名いるのに対し、正常児群には1名もいなかった。

このことは、知障児群には、「は」を主語を示す助詞としてとらえているが、「が」とのニュアンスの違いや使い分けの原則をつかんでいない被験児がいる、という可能性を示している。

「は」と「が」のように、論理的に誤った使い方をしていない場合、「誤り」ではなく「不適切」な使用ということになる。

本研究でも7名の大学院生に助詞の不適切な使用の指摘を依頼したが、5名以上の一致がみられたのは知障児群は362助詞中3助詞であり、正常児群は352助詞中ひとつの助詞もなかった。

使用が不適切であると決定するためにはいくつかの条

表1 50%以上の被験児が1回以上使用した助詞の種類と使用した被験児の割合

助詞の種類	被験児群	使用回数				助詞の種類	被験児群	使用回数					
		1回以上	7回以上	13回以上	26回以上			1回以上	7回以上	13回以上	26回以上		
格	が	M. R. (知障児)	96.4%	71.4%	64.3%	42.9%	係助詞	は	M. R.	85.7%	57.1%	28.6%	10.7%
		N. (正常児)	100.0	100.0	96.8	87.1			N.	87.1	45.2	22.6	3.2
	を	M. R.	96.4	75.0	53.6	10.7	係助詞	も	M. R.	75.0	7.1	0	0
		N.	100.0	83.9	61.3	25.8			N.	77.4	6.5	0	0
	に	M. R.	92.9	50.0	32.1	3.6	副助詞	か	M. R.	67.9	28.6	10.7	3.6
		N.	100.0	93.5	67.7	3.2			N.	96.8	25.8	3.2	0
	の	M. R.	78.6	35.7	21.4	0	並立助詞	と	M. R.	53.6	10.7	3.6	0
		N.	100.0	74.2	38.7	0			N.	54.8	6.5	0	0
	と	M. R.	89.3	25.0	7.1	0	接続助詞	て(で)	M. R.	89.3	67.9	64.3	39.3
		N.	96.8	45.2	3.2	0			N.	100.0	93.5	83.9	64.5
	へ	M. R.	53.6	3.6	0	0		て(で) (補助用言に連なる)	M. R.	100.0	100.0	100.0	71.4
		N.	67.7	0	0	0			N.	100.0	100.0	100.0	64.5
って	M. R.	75.0	35.7	0	0	から		M. R.	50.0	7.1	0	0	
	N.	93.5	32.3	16.1	3.2			N.	90.3	58.1	22.6	3.2	
から	M. R.	67.9	21.4	10.7	0	ね(ねえ)		M. R.	67.9	39.3	32.1	21.4	
	N.	71.0	6.5	0	0			N.	87.1	80.6	80.6	77.4	
で	M. R.	82.1	7.1	0	0	の		M. R.	75.0	46.4	28.6	17.9	
	N.	96.8	16.1	0	0			N.	87.1	80.6	80.6	58.1	
準助体詞	の	M. R.	64.3	7.1	3.6	0		な	M. R.	46.4	10.7	3.6	0
		N.	80.6	9.7	0	0			N.	54.8	6.5	0	0

(太字は50%以上を示す)

件が必要であろう。しかし、現状ではまったく主観的判断に頼っている状態であり、「不適切」と決定することは、論理的にとらえられる「誤り」を決定することより一致が困難な状況にあると言える。このため、このような結果になったものと考えられる。

「不適切」をどうとらえるかは助詞の使い方を指導する上においても大切な問題であり、方法論的な検討が望まれる。

2. 助詞の用法

「助詞の種類」では、使用された助詞の種類は格助詞がもっとも多く、また、格助詞のうち「が」、「を」、「に」が基本的で重要であることが明らかとなった。そこで、

助詞の用法は、格助詞「が」、「を」、「に」について分析した。

格助詞「が」、「を」、「に」の用法と使用した被験児の割合は表2の通りである(使用されなかった用法は除いてある)。

「が」は「主語を表わす」用法のみ、「を」は「他動性の動作・作用の目的・目標」の用法のみが、50%以上の被験児に使われていた。特に「を」の場合、他の用法はほとんど使われていない。

「に」は、知障児群で50%以上の被験児が使用したのは2つの用法、正常児群では5つの用法であり差が大きい、30%以上の被験児が使用した用法は、両被験児群

表2 使用された格助詞「が」「を」「に」の用法と使用した被験児の割合

助詞種の類	被験児群	使用回数	被験児群				
			1回以上	7回以上	13回以上	26回以上	
が	主語を表わす	M. R.	96.4%	71.4%	60.7%	42.9%	
		N.	100.0	100.0	96.8	87.1	
	対象語を表わす	M. R.	25.0	0	0	0	
		N.	48.4	0	0	0	
を	他動性の動作・作用の目的・目標	M. R.	96.4	75.0	39.3	14.3	
		N.	100.0	83.9	61.3	22.6	
	臨時に他動性を帯びた自動詞の目的・目標	M. R.	3.6	0	0	0	
		N.	0	0	0	0	
	自動性の動作（移動性のもの）の行われる場所・時	M. R.	0	0	0	0	
		N.	3.2	0	0	0	
	対象語格を示す	M. R.	3.6	0	0	0	
		N.	3.2	0	0	0	
	に	動作・作用の行われる空間的な場所の定位・位置を示す	M. R.	42.9	0	0	0
			N.	87.1	0	0	0
動作・作用の行われる時・場合を示す		M. R.	35.7	0	0	0	
		N.	45.2	0	0	0	
動作・作用の到達する地点・状態		M. R.	78.6	17.9	3.6	0	
		N.	96.8	48.4	6.5	0	
動作・作用の向けられる対象の事物		M. R.	60.7	0	0	0	
		N.	77.4	0	0	0	
動作・作用がなんのために行われる（存在する）かの目的を示す		M. R.	42.9	0	0	0	
		N.	64.5	0	0	0	
動作・作用のよりどころ・由来		M. R.	39.3	0	0	0	
		N.	64.5	0	0	0	
動作・作用・状態の行われ方・あり方		M. R.	0	0	0	0	
		N.	9.7	0	0	0	

(太字は50%以上を示す)

とも6つの用法であった。知障児群も正常児群と似た使用の傾向を示しているが、知障児群は「に」の全体の使用数が少ないため、50%以上の被験児が使用した用法が正常児より少なくなっていると考えられる。

「に」は、6つの用法が30%以上の被験児に使用され

ているが、「動作・作用の到達する地点・状態」の用法を除いて7回以上使用した被験児は1名もない。そして「動作・作用の到達する地点・状態」の用法も7回以上の使用者は50%以下である。つまり、「に」は「が」や「を」とは異なり、もともと用法の数も多いが、1つ

表3 省略された助詞の種類と省略した被験児の割合

助詞の種類	被験児群	省略回数			助詞の種類	被験児群	省略回数					
		1回以上	7回以上	13回以上			1回以上	7回以上	13回以上			
格助詞	が	M. R.	75.0%	7.1%	0%	格助詞	って	M. R.	3.6%	0%	0%	
		N.	64.5	6.5	0			N.	0	0	0	
	を	M. R.	100.0	71.4	46.4		から	M. R.	3.6	0	0	
		N.	90.3	61.3	35.5			N.	0	0	0	
	に	M. R.	50.0	0	0		で	M. R.	35.7	0	0	
		N.	54.8	0	0			N.	19.4	0	0	
	の	M. R.	25.0	0	0		係助詞	は	M. R.	53.6	10.7	3.6
		N.	9.7	0	0				N.	19.4	0	0
	と	M. R.	17.9	0	0		並立助詞	と	M. R.	3.6	0	0
		N.	12.9	0	0				N.	3.2	0	0
	へ	M. R.	42.9	0	0							
		N.	22.6	0	0							

(太字は50%以上を示す)

の用法に集中して使用されるというより、いくつかの用法が少しずつ使用されているといえる。

3. 助詞の省略

両被験児群が省略した助詞の種類と省略した被験児の割合は表3の通りである。

省略された助詞は、係助詞「は」と並立助詞とを除き、いずれも格助詞である。

だいたいにおいて、知障児群のほうが省略した助詞の被験児の割合が高いが、助詞の種類は両被験児群が似たような省略の傾向を示している。係助詞「は」のみ知障児群の省略が非常に多いが、これは、「助詞の種類」で述べたように、知障児群は「コレハ……」のような言い方が多く、この言い方で「は」を省略した文が多かったことからきている。この「は」を除くと、正常児群は変化がなく、知障児群は「は」を1回以上省略した被験児は32.1%、7回以上省略した被験児は1名もなし、ということになる。

省略した助詞のうち、格助詞「が」、「を」、「に」については用法も検討した。表4に示してある。使用した助詞の用法と似た傾向を示しており、「が」は「主語を表わす」用法、「を」は「他動性の動作・作用の目的・目標」の用法、「に」は「動作・作用の到達する地点・状態」の用法の省略が多い。

4. 助詞の誤り

両被験児群の助詞の誤りの頻度は表5、知障児群の誤りの頻度が4以上の誤りのタイプとその頻度は、表6の通りである。

知障児群、正常児群とも、誤りがもっとも多い助詞は「を」であり、次いで「が」、そして「に」であった。

誤りをタイプ別にみると、両被験児群とも「を」を「が」として誤っているタイプ（以下、「を」→「が」タイプとする。他のタイプの誤りも同様に表わす。）がもっとも多い。特に正常児群では、他のタイプの頻度は1~3であるのに対し、11と著しい。知障児群は、次いで、「が」→「を」タイプ、「を」→「に」タイプ、「が」→「に」タイプがほぼ同じ頻度であり、そして、「に」→「を」タイプ、「に」→「が」タイプと続く。正常児群もこれらのタイプの誤りはあるが、すべて頻度1~3と少ない。

このようにみえてくると、誤りの多い助詞は格助詞の「を」、「が」、「に」であり、頻度の高い誤りのタイプはいずれもこれら3つの助詞の間で誤っているタイプであるといえる。

また、誤った助詞は、知障児群に1種類の並立助詞があるのみで、あとはすべて格助詞であった*。

話しことばにおける助詞の誤りは成人にもみられるものであり、本研究で取り上げる誤りのなかには、緊張な

* 並立助詞は格助詞として分類されることもある。

表4 省略された格助詞「が」「を」「に」の用法と省略した被験児の割合

助詞の種類	助詞の用法	被験児群	省略回数			
			1回以上	7回以上	13回以上	26回以上
が	主語を表わす	M. R.	75.0%	7.1%	0%	0%
		N.	64.5	6.5	0	0
	対象語を表わす	M. R.	10.7	0	0	0
		N.	12.9	0	0	0
を	他動性の動作・作用の目的・目標	M. R.	100.0	71.4	46.4	10.7
		N.	90.3	61.3	35.5	0
に	動作・作用の行われる空間的な場所の定位・位置を示す	M. R.	7.1	0	0	0
		N.	12.9	0	0	0
	動作・作用の行われる時・場合を示す	M. R.	3.6	0	0	0
		N.	6.5	0	0	0
	動作・作用の到達する地点・状態	M. R.	35.7	0	0	0
		N.	38.7	0	0	0
	動作・作用の向けられる対象の事物	M. R.	17.9	0	0	0
		N.	3.2	0	0	0
	動作・作用がなんのために行われる（存在する）かの目的を示す	M. R.	3.6	0	0	0
		N.	16.1	0	0	0

(太字は50%以上を示す)

表5 助詞の誤りの頻度

誤った助詞	被験児群	頻度(人数)	誤った助詞	被験児群	頻度(人数)	
格助詞	を	M. R.	格助詞	の	M. R.	2(2)
		N.			N.	2(2)
	が	M. R.		と	M. R.	2(2)
		N.			N.	0
並助立詞	に	M. R.	並助立詞	と	M. R.	4(3)
		N.			N.	0
	で	M. R.				
		N.				

表6 知障児群の誤りの頻度が4以上の助詞の誤りのタイプと頻度

誤りのタイプ	被験児群	頻度(人数)	誤りのタイプ	被験児群	頻度(人数)
「を」→「が」	M. R.	13(6)	「に」→「を」	M. R.	4(1)
	N.	11(10)		N.	1(1)
「が」→「を」	M. R.	8(6)	「が」→「に」	M. R.	9(7)
	N.	3(3)		N.	1(1)
「を」→「に」	M. R.	8(7)	「に」→「が」	M. R.	4(3)
	N.	1(1)		N.	2(2)

したがって、ここでは、頻度の高かった格助詞「が」、
「を」、
「に」の誤りに関してこれらの誤りのもつ共通点をあげ、誤りの原因の可能性を探ってみたい。

誤りのもつ共通点から、「助詞の用法に関係があると考えられる誤り」、「自動詞と他動詞の混同による考えられる誤り」、「助動詞の使用に関係があると考えられる

どによる誤りも含まれている可能性がある。しかし、話しことばのみの分析によって学習上の誤りと単なる使用上の誤りを区別することはむずかしく、また誤りの原因を確定することもむずかしい。

誤り」が考えられた。これらにしたがって、考察をすすめる。

1) 助詞の用法に関係がある誤りと自動詞と他動詞の混同による誤りの2つの可能性が考えられる誤り

「を」→「が」タイプの誤りは、知障児群13例、正常児群11例であり、両群ともすべて、「他動性の動作・作用の目的・目標」の用法である「を」を「が」に誤っていた。

また、「が」→「を」タイプの誤りは、知障児群8例、正常児群3例であり、両群ともすべて、「主語を表わす」用法である「が」を「を」に誤っていた。

そして、「を」→「が」タイプの誤りでは、知障児群11例(84.6%)、正常児群11例(100%)に、「が」→「を」タイプの誤りでは、知障児群5例(62.5%)、正常児群3例(100%)に、誤った助詞とともに用いた動詞に共通点が見い出された。

① 対応する自動詞が可能動詞である他動詞とともに使われている誤り

「を」→「が」タイプの誤りで見い出された共通点は、誤った助詞とともに用いられた動詞が、「描く」、「打つ」のように、対応する自動詞として、「描ける」、「打てる」のような可能動詞しかもたない他動詞であるという点である(このようなタイプの動詞を以下Aタイプの動詞、これ以外の動詞をBタイプの動詞とする)。

可能動詞は、「絵が描ける」、「ボールが打てる」のように、「対象語を表わす」「が」とともに用いられることが多い。

この「絵」や「ボール」は文法的には「対象語」ではなく「目的語」であり、「が」は「目的語を表わす」とする説もあり(久野, 1973)、「が」の「対象語を表わす用法」と正しいとされた「を」の「動作・作用の目的・目標」の用法は、非常に類似した用法であるといえることができる。

また、「を」には、「絵を描ける」のように、「が」と同じく「対象語格を示す」用法もある。

以上のことから、誤りの原因として、「が」と「を」の用法の一部がもつ類似性と同一性から「が」と「を」の混乱が生じ、「エガク」(以下、被験児が実際に話した例はカタカナで示す。ただし、すべて終止形に直してある)、「ボールガウツ」のように、「が」を用法の類似した「を」のかわりに用いた、つまり、「が」と「を」の用法をある程度つかんではいるがまだ未分化の状態にある、という可能性が考えられる。

この「が」と「を」の混乱は、Aタイプの動詞の分化

に影響を与えるであろう。そして、「が」と「を」の用法の類似点、同一点を考えると自動詞も他動詞としてとらえていると思われる。

また、可能動詞は「絵が描ける」のように対象語をとる。すでに述べたように、この「絵」は文法的には「目的語」であるという説もあって、対象語は他動詞の目的語と非常に類似している。このため、可能動詞も他動詞としてとらえ、「が」と「を」が混乱し、可能動詞とともに用いられる「が」を他動詞とともに用いたことも誤りの原因の可能性として考えられる。

② 自動詞とともに使われている誤り

「が」→「を」タイプの誤りの8例に共通するのは、「を」を「アナヲク」、「アミヲブケル」のように、自動詞とともに用いた点である。

「を」には、「町に行く」のような「自動性の動作の行われる場所・時」の用法や、子どもとの会話では少ないと思われるが、「臨時に他動性を帯びた自動詞の目的・目標」の用法があり、自動詞とともに「を」が使われることもある。

このことから、誤りの原因として「を」の用法を的確にはつかんでいないことが考えられる。

この用法の未分化は自動詞と他動詞の分化に影響を与えるであろう。「を」は「動作・作用の目的・目標」の用法で他動詞とともに使われることが多いため、自動詞も他動詞としてとらえていることが考えられる。

また、もう1つの可能性としては、自動詞と他動詞が未分化であり、自動詞も他動詞としてとらえていることが考えられる。

以上述べてきた「を」→「が」タイプの誤りの共通点と「が」→「を」タイプの誤りの共通点から誤りの原因として助詞の用法の未分化と動詞の未分化の2つの可能性が考えられた。

そして、この2つの可能性から、どちらが原因であるにしろ、

1. 自動詞は他動詞から分化する。
2. 「が」の「主語を表わす」用法と「を」の「他動性の動作・作用の目的・目標」の用法の習得と、動詞の分化は関係がある。
3. 助詞の習得過程は知障児、正常児とも同じである。

という3点が仮説として考えられる。第3の仮説は両群とも助詞の誤りが同じ傾向であったことから導かれる。

天野(1977)によれば、幼稚園の年少児と年長児を通じて、Bタイプの動詞の自動詞と他動詞を混同した反応

はずかではあるが、すべて、自動詞を他動詞で反応している。このことは、自動詞は他動詞から分化するという可能性を支持している。

2) 助詞の用法に関係があると考えられる誤り

「を」→「に」タイプの誤りは、知障児群 8 例、正常児群 1 例であり、使用されるべき「を」はすべて、「他動性の動作・作用の目的・目標」の用法の「を」であった。

「に」には、動作・作用の「到達点・行き着く所・方向」や、「動作・作用の向けられる対象の事物」の用法があり、「を」の「動作・作用の目的・目標」の用法と類似している。したがって、「壁にかける」、「友達に言う」などの「に」の使い方から、「アタマにナセル」や「ゲタにハク」、「キにミル」のような誤りがでてきたと考えられる。

「に」→「を」タイプの誤りは、知障児群 4 例、正常児群 1 例であり、使用されるべき「に」はすべて、「到達点・行き着く所・方向」の用法の「に」であった。

「を」には、すでに述べたように、「動作・作用の目的・目標」の用法や「町を行く」のような「自動性の動作の行われる場所・時」の用法がある。したがって、これらの用法と、正しいとされる「に」の「到達点・行き着く所・方向」の用法との類似性から、「クチャハイル」、「ハコヲアガル」、「レストランヲイク」のような誤りが生じてきたと考えられる。

また、「に」→「が」タイプの誤りのなかに、「動作・作用の向けられる対象の事物」の「に」と「対象語を表わす」がの混乱とみられる例もあった。

助詞の用法をまだ的確につかんでいない、つまり、用法が未分化の状態にあることが示唆される。

助詞は、用法が未分化で成人の規準からいえば誤った使用とされることもある状態から、使い分けの原則をつかみしだいに分化していくと考えられる。

そして、助詞の習得過程をみる場合、ある助詞を習得していない、習得したといったとらえ方ではなく、それぞれの発達段階に応じた助詞の分化の状態があり、その助詞がどこまで分化したか、あるいは、成人の規準でいえばその助詞の何を習得したか、といったとらえ方をすることが必要であると思われる。

3) 助動詞の使用に関係があると考えられる誤り

「に」→「が」タイプ、「が」→「に」タイプの誤りには、受身の助動詞「れる」、「られる」と使役の助動詞「せる」、「させる」に関係があると思われる誤りがみられた。

つまり、「に」→「が」タイプ、「が」→「に」タイプの誤りには、「イヌガオワエラレル」、「ミンナにワラウ」

表 7 助詞の誤りの判定数と一致人数
(7名の判定による)

被験児群	一致人数							計
	1名	2名	3名	4名	5名	6名	7名	
M. R.	122	45	28	29	22	15	22	283
N.	98	23	12	12	12	8	6	171

のように、「～が～する」と「～に～される」が混乱したと考えられる例、「イヌにハシル」、「コノヒトにミテル」のように、「～が～する」と「～に～させる」が混乱したと考えられる例があった。

また、「を」→「が」タイプにも、「おしょうさんを困らす」が「オショウサンガコマラス」となり、「～が～する」と「～を～させる」の混乱とみられる例があった。

以上、誤りの多い「が」、「を」、「に」を含むタイプの誤りについて考察し、誤りの原因を探ってきた。

ここで「誤り」について触れておきたい。

助詞の誤りは、判定者 7 名中 5 名以上の一致があった助詞を誤りとした。助詞の誤りの判定数と一致人数は表 7 の通りである。

知障児群は、全判定助詞数 283 のうち、5 名以上の一致があったのは、59 (20.8%) であり、正常児群は、171 のうち 26 (15.2%) であった (「方法」で述べたように、ある文を意味不明文と判定した判定者はその文に含まれる助詞の判定者とはならないため、一致人数が 4 名以下でも 5/7 以上の割合で一致した場合は誤りとしており、実際に誤りとした助詞の数はもう少し多い)。また、7 名中 5 名以上の一致があった誤りは各判定者の判定数の 32.1%~73.0% となっている。つまり、誤りを複数の判定者で決定することにより判定が困難な場合のよりどころにすることはできたが、各判定者の基準が異なるため実際に誤りとして取り上げた数は非常に少なくなっている。

したがって、それぞれの誤りのタイプの頻度は少なかったが、今まで述べてきた誤りに関する考察は、もっと多くの誤りに関する考察として考えていいと思われる。

「誤り」の判定については、「不適切」な使用の判定と同様に方法論的な検討が必要である。

文 献

- 1) 天野清, 就学前児童の言語的コミュニケーション能力. 日本心理学会第 32 回大会発表論文集, 1968, 329.

- 2) 天野清, 幼児の文法能力. 東京書籍, 1977.
- 3) Goda, S. and Griffith, B. C., Spoken language of adolescent retardates and its relation to intelligence, age, and anxiety. *Child Development*, 1962, 33, 489-498.
- 4) Goodwin, F. G., A consideration of etiologies in 454 cases of speech retardation. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 1955, 31, 300-303.
- 5) 池弘子・斎藤義夫・小林重雄, 知能障害児の話しことばに関する研究—その文章構造の特性について—. 特殊教育学研究, 1978, 16, 1-13.
- 6) Karlin, I. W. and Strazzula, M., Speech and language problems of mentally deficient children. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 1952, 17, 286-294.
- 7) 小井戸博, 精神薄弱児の「話しことばの語い」の分析. 精神薄弱児研究, 1963, 53, 9-12.
- 8) 国立国語研究所, 現代語の助詞・助動詞—用法と実例—. 秀英出版, 1951.
- 9) 久野暲, 日本文法研究. 大修館書店, 1973.
- 10) Lovell, K. and Bradbury, B., The learning of English morphology in educationally subnormal special school children. *American Journal of mental Deficiency*, 1967, 71, 609-615.
- 11) Lyle, J. G., Comparison of the language of normal and imbecile children. *Journal of mental Deficiency Research*, 1961, 5, 40-50.
- 12) Mein, R., A study of the oral vocabularies of severely subnormal patients, II. Gramatical analysis of speech samples. *Journal of mental Deficiency Research*, 1961, 5, 52-59.
- 13) Mein, R., Use of the Peabody Picture Vocabulary Test with severely subnormal patients. *American Journal of mental Deficiency*, 1962, 67, 269-273.
- 14) Mein, R. and O'Connor, N., A study of the oral vocabularies of severely subnormal patients. *Journal of mental Deficiency Research*, 1960, 4, 130-143.
- 15) 永野賢, 学校文法概説. 朝倉書店, 1958.
- 16) Newfield, M. U. and Schlanger, B. B., The acquisition of English morphology by normal and educable mentally retarded children. *Journal of Speech and Hearing Research*, 1968, 11, 693-706.
- 17) 西田直敏, 助詞(1). 大野晋・柴田武編, 日本語7文法Ⅱ. 岩波書店, 1977.
- 18) Schlanger, B. B., Speech measurements of institutionalized mentally handicapped children. *American Journal of mental Deficiency*, 1953, 58, 114-122.
- 19) Siegel, G. M., Interexaminer reliability for mean length of response. *Journal of Speech and Hearing Research*, 1962, 5, 91-95.
- 20) 渡辺健郎・松田善衛・佐藤俊雄, 精神薄弱児の言語発達に関する研究—言語表現能力の検討—. 日本特殊教育学会第12回大会論文集, 1974, 134-135.
- 21) 山崎典子, 精薄児の話しことば. 精神薄弱児研究, 1964, 70, 34-37.

Summary

A STUDY OF SPEECH IN MENTALLY RETARDED CHILDREN

—THE USE OF JOSHI—

HIROKO IKE

Previous investigations concerning the speech of retarded children have shown that speech structure, including vocabulary, syntax, phonology and morphology, develops with increasing of M. A. It seems, however, that difficulties exist in applying the results of surveys on speakers of English to those of Japanese, and there has been little investigation with characteristics of Japanese in the speech of retarded children.

The purpose of the study is to make clear the acquisition process of JOSHI (particles), which is one of the main characteristics of Japanese, in comparing the speech of retarded children with that of normal children.

Method

The subjects were 28 retarded and 31 normal children with M. A. from 6-0 to 7-11. The retarded children were pupils of a junior high school for retarded children and the normal children were first-grade pupils of a public primary school.

The materials which were used to elicit verbal responses were 13 sets of pictures, each containing 4 pictures.

Spoken were analyzed around 4 aspects of JOSHI; the variety, how to use, omission and misuse.

Results and Discussin

The main results and discussin are as follows:

- (1) The analyzing on the misuse of JOSHI leads us to three hypotheses of the acquisition process of JOSHI and verb. The first is that at the early stage children aren't appeared to differentiate the intransitive verb and transitive verb and are considered of both as the transitive verb. The second is that the differentiation of how to use JOSHI "WA" and "GA" is closely concerned with the differentiation of verb. The third is that both groups go through the similar acquisition process of JOSHI.
- (2) KAKU-JOSHI, especially "GA", "O" and "NI", are frequently used in more than 50% of all subjects. Such tendency of frequent using is found in only KAKU-JOSHI using.
- (3) The difference between KAKU-JOSHI "WA" and KAKU-JOSHI "GA" has been discussed by many reseachers and in many cases "WA" and "GA" are exchangeable. In exchangeable "WA" and "GA", only retarded children are more likely to use "WA" than "GA". This suggest that some retarded children don't know the difference of nuance between "WA" and "GA" and rule of proper use of them.
- (4) Both groups have similar trends on how to use of JOSHI and omission of JOSHI.